

モンテッソーリ教育フィンランド・ロシア視察旅行報告

日本モンテッソーリ教育総合研究所上席研究員

海外視察旅行コーディネーター 松浦 公紀

2011年度の海外視察旅行では北欧に位置するフィンランドと日本の45倍の広さを持ち、ヨーロッパからアジアに掛けて9つの時間帯を持つ世界最大の国ロシアを訪ねました。

長い歴史と文化の根付いているヨーロッパはマリア・モンテッソーリを生んだ土地でもあります。しかし、同じヨーロッパでもモンテッソーリの母国イタリアを初めとする南欧と今回訪れたフィンランドが位置する北欧、そして距離的には隣接しているもののロシアとでは様々な面で異なります。

マリア・モンテッソーリの母国であるイタリアでのモンテッソーリ教育の実情は残念ながらあまり芳しいものではありません。第2次世界大戦を目前に控えていた時期に、モンテッソーリは一時的にはあっても当時のイタリアの独裁者であったムッソリーニから支援を受け、イタリアの文部省はファシズムとモンテッソーリ教育法を統合しようとした時期がありました。この事実が少なからぬモンテッソーリ教育に対する批判、非難を招いたことは想像に難くありません。マリア・モンテッソーリが晩年までの3年間連続してノーベル平和賞の候補にノミネートされながら受賞に至らなかった理由もここにあると言われています。

終戦を境にしてモンテッソーリ教育はその発祥の地イタリアでは過去のものとなっていったようです。とは申しませんが、モンテッソーリの母国であるだけにペルージアには国際コースがありますし、ベルガモには小学校課程のコースも存在します。また、ローマにはモンタナーロ博士が乳幼児コースを開設しています。しかし、イタリアでの教員養成はこの国際コースによるものだけで、他の機関のコースはありませんし、モンテッソーリ教育を実施している施設は250ヶ所ほどです。実施園の数で言えば日本の方が4倍程多いでしょう。したがって、イタリアでの教員養成コースには自国のイタリア人よりも他の国からの生徒の割合の方が多くいます。教員養成自体もイタリア語と同時に英語の通訳も付くようになりました。

さて、今回の視察ではフィンランドの首都ヘルシンキで1校、ロシアでは帝政時代の首都であったサンクトペテルブルクで1校の2校の視察を行いました。国は異なりましたが、いずれの学校もモンテッソーリ教育に真剣に取り組む気質を持った先生方に出会うことができました。ヘルシンキでは施設の大きさや、園のスケジュール、見学時間の関係で子ども達が普段の自然な姿で活動する姿は残念ながら見られませんでした。しかし、現場の自然な姿を見る機会や時間がなかった代わりに施設をリードするオルガ先生からのお話をじっくり聞くことができ、参加された先生方も自由に活発な質疑をする時間に恵まれました。オルガ先生からはモンテッソーリ教育を過去に確立した教育法として維持、継続をしようとするだけでなく、それを土台にして現代という時代にマッチさせようとする姿勢が伺われました。

ヘルシンキモンテッソーリプレスクールは3歳児から6歳児まで合計45名ほどの子ども達が集う学校でした。集合住宅の2階部分を学校として設置し、運動場は通りを隔てたところにある公園を使用していました。看板にはヘルシンキイングリッシュスクールと記されており、校内では全てが英語でコミュニケーションがとられています。環境はモンテッソーリ教具だけでなく、おままごとやお絵かき等のコーナーも見受けられました。モンテッソーリの環境としては日常生活の練習の環境に手作りの工夫がよく見られました。また、言語教育の環境は英語での絵カードを初めとしたやはり手作りの教材が豊富に準備されていました。教材類の収納は透明の容器など子どもが見て何かがすぐに分かるような配慮もなされていました。また、モンテッソーリ教具以外にもヨーロッパに数多く存在する木製知育玩具も環境として設定されていました。モンテッソーリ教具は日本で圧倒的な割合で使われているニーホイス社製の物もありましたが、手作りの物や他の教材会社の物もありました。



あけ移しから注ぐの環境



通すから縫うの環境



言語教育の環境



おままごとのコーナー



通りを隔てた公園

2階部分が学校

このヘルシンキモンテッソーリプレスクールのみならず、これまで海外視察旅行で訪れたヨーロッパの国々には英語を使用言語としたモンテッソーリ教育の園が数多く存在します。第1外国語というよりはより母語に近い第2母語といった感じで自在に英語を使いこなす子どもが数多く輩出されているようです。

私達に話をしてくれたオルガ先生はロシア人でモンテッソーリの資格はアメリカのミネソタ州で取得されたそうです。フィンランドという国で、ロシア人でアメリカでモンテッソーリを学んだ先生が子どもの教育に当たっている。この事実だけでもいかに国際化が日本以外の国では当たり前のように進んでいるかが伺われました。

私達モンテッソーリを知っている日本人の基準からすると、モンテッソーリオンリーではなく、シュタイナーっぽい匂いがしたり、コーナー保育的な匂いがしたり、(これはフィンランドに限らず、ドイツ以北の北欧の国全てに当てはまります)知育玩具とのブレンドでの環境構成であったりしました。

モンテッソーリ教育を核として、集合住宅のワンフロアで学校を開設することができ、それなりの助成金も受け取ることができるシステムの中に政府の教育に対する柔軟性が見て取れました。

ヘルシンキから空路で約50分、ヨーロッパの文化が香る街サンクトペテルブルクに到着しました。ここでの訪問園はバレンティナ・ミハエローバ先生の主宰するミハエローバスクールです。3箇所の施設を持ち、0～3歳の子どもが母子共に通園、3～6歳の子どもが子どもだけで週何回か通園する施設。3～6歳の幼稚園。国立学校に間借りをするモンテッソーリの小学校です。私達が見学をしたのは0～3歳の子どもが母子共に通園、3～6歳の子どもが子どもだけで週何回か通園する施設でした。

どのクラスの環境もモンテッソーリ教育を受けた私達日本人には安心するような環境でした。特に、0～3歳の環境は「動き」ごとに教材類のコーナーが設定されており、そこに行けばすぐに活動に取り掛かることができる工夫がなされていました。円柱さしや、ピンクタワーなども10個ではなく、数を減らして難易度を低くした設定がされていました。この0～3歳のクラスでは母子と一緒に活動をする様子を見学することができましたが、子どもの活動に関わる姿勢はもちろんのこと母親や父親がどのように子どもの活動を見守るべきかが、どのように子どもに接するべきかが教師によってよく伝えられていることが伺われました。こういった保護者に対する発信が日本でももっとも必要になることが想定されます。

3～6歳の環境も分野ごとにほとんどの教具が準備されており、充実した教育内容を窺い知ることができました。感覚教具のピンクタワー、茶色の階段、長さの棒でのバリエーションなどのイラストも充実していました。単にバリエーションが描かれているだけでなく、その立面図、側面図、平面図が3方向から別々に記されているカードが準備されているなど、教具での基本提示に限定されることなく子どもの創造力や理解力を伸ばそうとする姿勢も伝わってきました。茶色の階段のそばにはビー玉が一個、木のお皿に入っており、階段を完成させた子どもがきつとビー玉を上から転がしているんだらうと微笑ましく思いました。日本ではこの準備を見てどう思われるのでしょうか。



0歳～3歳の環境



母子通園教室



3歳～6歳クラス バリエーションカード

3歳～6歳クラス 言語・算数コーナー



ミハエローバスクール
1階部分が学校

各クラスの見学後、この学校のビデオの上映や先生方との意見交換の場が設けられ、大いに語り合い、親交を深めることができたのは幸いなことでした。

日本にはまだモンテッソーリ教育の小学校は存在しませんが、この学校ではその片鱗をビデオで見ることができました。時代が変わっても変わらぬモンテッソーリの考え方の一つが「個別の能力に応じた対応」です。一斉画一ではなく、個々の学力に見合ったメニューが準備されており、個々のペースに合わせ

て、時には教具を用いて、時にはグループで話し合いながら、時には友達の助けを借りながら学習を進めていきます。教師はまさにコーディネーターとして、個々の生徒の学習能力や性格を見極めて、その能力がなるべく100%に近い形で現れるような援助をするわけです。そして、学習自体はもちろん子どもが主体となっていくのです。

今回の視察では訪ねたフィンランドを初めとした北欧の国々は世界的に見ても児童の学力が非常に高い国々です。そして、これらの国々では総合的な学習の時間がますます増加傾向にあります。反面、日本に目を向けると、「学力の低下」が声高に叫ばれ、総合的な学習の時間は減少して、教え込み、詰め込みによる国語や算数といった従来から言われる主要科目の時間数が増加しています。教師主導の一方通行の管理する教育現場から、子どもが主体となって学ぶ喜びを感じることのできる教育現場への転換が切に望まれます。そのためには、「子どもが育ちの、発達の主体になり得るんだ」ということに気付かなければいけません。そして、それを気付かせてくれるのがモンテッソーリ教育のほうです。

視察旅行レクチャーの中にも書いておりましたが、ロシアのモンテッソーリの状況は非常に幅があります。有名無実のモンテッソーリという看板を掲げただけの学校も数多く存在します。そういった状況の中で、このミハエローバスクールは確実にこれからのロシアのモンテッソーリ教育をリードしていく立場にある学校です。そんな学校を訪ねることができて本当に嬉しく思います。

今回の2校の視察を振り返ってみると、いずれの学校でも100年以上前に始まったモンテッソーリ教育から学んだことを今という時代の子ども達に上手に利用しているという実感を受けました。100数年前の方法に固執するあまり、モンテッソーリ教育から革新性が抜けてしまうことはやはりモンテッソーリ教育のあるべき姿ではないのでしょうか。

100数年前の方法をその時の姿のまま子どもに伝えるのではなく、そこに時代のニーズ、地域のニーズ、そして、それは今を生きる子どものニーズでもあるのですが、を付加してより子どもに貢献するモンテッソーリ教育の伝授と実践、普及こそが望まれます。

1907年、マリア・モンテッソーリがローマのサンロレンツォ地区に初めての子どもの家を開設してからちょうど104年。104年前のモンテッソーリの実践から引き継がれる部分も絶対的なものとしてももちろん存在します。それらはモンテッソーリ教育の普遍的な部分です。しかし、時代の推移とともに子どもの本質は変わらなくとも、子どもの生活環境は大きく変貌しています。その変化に合わせてモンテッソーリ教育も進化していかなければならないでしょう。この進化の割合が少なければ少ないほどモンテッソーリ教育は過去の教育違法として位置付けられ、ごく一部の信奉者のみのカルト的な教育法になり、普及どころか衰退の一途をたどるでしょう。

変化を感じ、それに相応の反応ができるためには私たち自身が生き方として、頑なになるのではなく、ある程度の柔軟性が必要になってくるでしょう。そして、その柔軟性の土台は視野の広さです。日本から一歩出て、外の世界を眺めることで私達の視野はぐんと広がります。

この次に私達が視野を広げることができる場合は、8月中旬に北京で開催されるモンテッソーリ・アジアの国際大会です。是非その場で皆さんと再会したいと思っております。